

技の肖像



鉋(かんな)を使ってケヤキの一枚板を削る増野繁治さん



1. 工房の2階には、増野さんが手掛けた重厚感あふれるテーブルや椅子などが置かれている。2. 毫の装飾が見事なピンテージ家具。増野さんによってリメイクされ、家具として再び命が吹き込まれる日を待っている。3. 筆筒に装飾金具を取り付ける

問い合わせ
工房 木香舎

〒981-3327
黒川郡富谷町穀田瀬ノ木 113
TEL 022-358-1141
http://www.mokkousya.com/



どちらも職種に関する優れた技能と知識を有することを認める国家資格で、取得するためには実技試験と学科試験の両方の技能検定試験に合格する必要があります。

技と知識を国が認める
「化学分析技能士」
「プラスチック成形技能士」

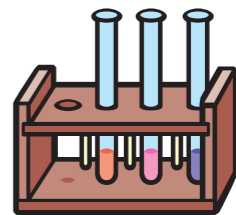
化学工場などで働く人たちは、火災や爆発の危険性が高い「消防上の危険物」や、労働者に健康障害を発生させる可能性がある「健康上の危険物」などの使用や廃棄する機会が多くなります。これら危険物から労働者を守るため、取り扱いに関する様々な資格があります。

特集 業界の勉強

エネルギー・資源業界で生かせる資格

「業界の勉強」では、仕事図鑑で取り上げた業界ならではの知識や資格などについて解説します。今回は、エネルギー・資源業界で働くために必要な「資格」を紹介します。

化学分析技能士には1〜3級(3級は2014年に新設)が、プラスチック成形技能士には特級および1〜3級があり、等級によって技能検定試験の難易度や受験資格(実務経験年数など)が異なります。技能検定合格者には、厚生労働大臣から等級に応じた合格証書と技能士章が交付されます。



消防上・健康上の危険物を扱う
「危険物取扱者」
「毒物劇物取扱責任者」

危険物取扱者は、「消防上の危険物」の取り扱いに必要な国家資格です。一般にこの資格を持つ人のことも「危険物取扱者」と呼んでいます。資格は、甲種・乙種・丙種の3種類に分けられ、それぞれ扱うことができる危険物が異なります。資格は、危険物取扱者試験に合格すれば取得することができます。

毒物劇物取扱責任者は、労働者に健康障害を発生させる毒物や劇物の製造・販売などを行う事業所で、設置が法律で義務付けられている責任者の一つです。試験に合格すると資格を持つことができますが、合格基準などは都道府県によって異なります。

危険物の種類によって様々 「作業主任者」

「特定化学物質作業主任者」や「有機溶剤作業主任者」はどちらも健康上の危険物を取り扱うために必要な国家資格です。有機溶剤は、揮発性が高く火災や爆発の危険性も高いことから、消防上の危険物の取り扱いに関する知識も必要になります。どちらの資格も技能講習を受講し、修了試験に合格することで取得できます。「作業主任者」は、取り扱うことができず危険物ごとに分かれていて、ほかにも「四アルキル鉛等作業主任者」「石棉作業主任者」「鉛作業主任者」があります。

仕事図鑑・用語解説

溶接 →P.07

2つ以上の金属を熱などで溶融し、接合させる作業。接着と異なる点は、接合した2つの金属が、分子レベルで一体化しているところである。現在、溶接は放電熱で金属を溶解するアーク溶接(電気溶接)とガスの燃焼熱を使ったガス溶接が主流で、溶接する金属の材質や厚さなどによって使い分けられている。



LNG (Liquefied Natural Gas) →P.11

天然ガスをマイナス162℃まで冷却し液化した無色透明の液体のこと。主な成分はメタンで、太古の動植物の死骸が、地中で長い歳月をかけて変化したものと考えられている。液化すると体積が気体の状態より約600分の1に減るため、天然ガスの大量輸送や貯蔵が可能になった。

木工家具 〈富谷町〉

貴族や武士の地位と権力の象徴するもの、庶民の暮らしに潤いを与えるものとして、椅子やテーブル、筆筒などの木工家具は、古くから人々に大切にされてきた。耐久性や機能性のほか、美しい装飾や洗練された形態など美的な側面も求められる。

富谷町で木工家具製作を手掛ける増野繁治さんは、小学生の時に訪れた「正倉院展」で目にした木工家具の美しさが、今も忘れられないという。

「千年以上の時を経てもなお、色あせることのないデザインと存在感には、感銘を覚えました」

中学生の時には日本橋の百貨店で仙台筆筒と出会い、家具職人になることを決意する。高校を出てすぐに東京から仙台に移り、仙台筆筒の工房で経験を積んだ。

25歳で独立、5年後には富谷町内で工房を開いた増野さんは、これまで伝統工法による注家具製作のスタイルにこだわってきた。毎年秋になると、地元の木材市場に足を運び、自分の目で丸太を選定する。近年、安価で扱いやすい輸入材や合板が普及し、国産の木材を丸太の状態から扱える職人も少なくなったと肩を落とす。「木の選定から製材、家具に加工するまで、すべてできるのが本来の家具職人の姿。お客様の要望を具現化し、さらに良い形を提案するための知識と経験、情熱を持った人といけない」と増野さんは語った。人を喜ばせる家具を作り続けるため、そして仙台筆筒の伝統と歴史を守り伝えるため、これからも木と向き合いながら、家具づくりを全身全霊を注ぐ。